中島敦「マリヤン」論
―― 島民に投影された作家の自己イメージ ――

洪　　瑟　君

一、はじめに

中島敦は昭和十六年の六月から昭和十七年の三月まで、南洋庁の役員として約八カ月パラオに滞在していた。内地へ戻ってから、南洋での見聞を基にして「南島譚」三篇と「環礁」六篇を書いた。「マリヤン」は「環礁」の五篇目の作品である。

「マリヤン」は文明と未開の価値観が混乱している南洋における主人公――半開化された島民女マリヤンの物語である。この作品については、多くの研究で中島の脱植民地主義思想の象徴として論じられている。例えば、山下真史は「この作品から浮かび上がってくるのは、植民地政策の犠牲者ともいえるマリヤンの痛みである」と述べ、中島が「自ら戯画化した〈私〉の中に、自己を韜晦させて批判を語」る方法を「環礁」諸編の中で用い、日本の植民地政策を批判していると主張している。[1]更に、須藤直人はマリヤンが『ロティの結婚』に不満を洩らし、内地人との結婚を拒否する描写を通し、中島が植民地を舞台とする「異人種間恋愛譚」を書き換え、「反植民地主義」「脱植民地化」を表現したと論じている。[2]同じくロバート・ティアニーも、中島がマリヤンの『ロティの結婚』に対する非難によって、「西洋眼鏡」で南洋を見る自分に気付いたと論じ、中島敦の脱植民地思想を述べている。[3]

上述のような諸研究では、殆どは〈私〉＝中島という図式を前提とし、マリヤンとの交流を通し、中島の反植民地主義思想を発見する視点で論じられている。もちろん、物語の筋によって、「マリヤン」における語り手の〈私〉を中島と見做すのは妥当であり、本稿ではこの図式の正当性を批判するつもりはない。

しかし、作中人物の名前をそのまま題とした作品「マリヤン」では、マリヤンという主人公の人物像の重要性は看過できない。後で述べるように、中島は作品中において敢えて傍点を使い、また「選択する目」[4]によって、故意に自分なりのマリヤン像を作り出した。そういう作家の創作意図を考えれば、「マリヤン」という作品の重心はマリヤンという人物にあり、作中の〈マリヤン〉＝中島という図式で読むことも可能である。そこで、本稿では、作品中におけるマリヤン像をもう一度検討し、「マリヤン」という作品を新たな読み方で解釈したい。

二、中島なりのマリヤン像 ―― 傍点の意味

マリヤンは実在した人物であった。中島の日記ではマリヤンに関して詳しく叙述されていないが、彼女の名前は確実に残されている。[5]また、上前淳一郎の実地調査によると、マリヤンは確かにコロールの酋長の娘であり、勉強家のインテリでもある。彼女は戦後、アメリカ軍の病院に看護婦長として勤め、そして島の小学校の先生になり、死ぬまでその仕事を続けていた。また晩年には地区議会の議員もしていたそうである。[6]しかし、作品中の〈私〉が必ずしも完全に中島自身に一致していないように、中島が描いた〈マリヤン〉も必ずしも本当のマリヤン像ではない。

「マリヤン」において、中島は常に〈私〉という語り手の眼差しを通しマリヤンを観察・描写している。一方、出現の回数は僅かであるが、マリヤンは稀に「語る者」として登場している。こうして、〈私〉の視座による描写だけではなく、マリヤン自身の話を引用することによって、作品におけるマリヤン像により一層真実味を与えている。しかし、「マリヤン」には、中島による傍点が所々見られる。そして、それらの傍点をよく考えると、中島の言葉に隠れている裏側の意味が読める。中島は表面的には南洋島における一人の島民女マリヤンを描いたが、実際には多重の描写技法を使い、自分なりのマリヤン像を作り出したのである。このように作られたマリヤン像の背後で、中島は一体何を表現したいのであろうか。中島の意図を探究するために、まずはマリヤン像を分析しなければならない。次に、中島の作品における傍点の意味・機能を探究し、傍点によって現れる文章の裏側の意味を探り、作中のマリヤン像を分析する。

（一）〈南洋物〉における傍点の分析

中島の作品では、傍点がよく使われている。傍点によって自分の表現したいことを強調、暗示する傾向は、早期の習作から最後の遺作まで少しも変わらなかった。各作品の中で使われている傍点は作品の内容や性質によって、それぞれ異なる意味を有しているのである。中島の作品における全ての傍点を逐一分析し、その意味・機能を全般的に考察するのは厖大な作業となり、本稿で全ての傍点について論証するのも至難の業である。中島の傍点に対する全面的な研究は今後の課題として、別稿で論じたいと思う。但し、傍点による中島なりのマリヤン像を有効に検証するため、本稿では、研究主題の「マリヤン」と同じく〈南洋物〉に属する作品、すなわち「南島譚」三篇（「幸福」「夫婦」「鶏」）及び「環礁」六篇（「寂しい島」「夾竹桃の家の女」「ナポレオン」「真昼」「マリヤン」「風物抄」）における傍点を取り上げ、中島による傍点の機能を概略的に考察する。

〈南洋物〉における傍点の数は次のようである。「幸福」では傍点を12箇所、「夫婦」では３箇所、「鶏」では６箇所で用いている。また、「寂しい島」では４箇所、「夾竹桃の家の女」では９箇所、「ナポレオン」では16箇所、「真昼」では13箇所、「マリヤン」では20

箇所、「風物抄」では14箇所で傍点を付けている。作中に傍点が付いている箇所を分析すると、中島による傍点の機能は主に三種類に分けられる。第一は文字使いを表す傍点である。すなわち、文に多くの仮名を使う時、文章を読みやすくなるために付けるものである。例えば、「マリヤンはH氏のことををぢさんと呼ぶ」(「マリヤン」)、「あのとぼけたをかしさがまるで無い」(「ナポレオン」)のような文で、「をぢさん」「とぼけた」「まるで」という単語を一目瞭然とさせるために、傍点が使われているのである。第二は「固有の意味を表す特殊な名詞」を表す傍点であり、中島が自分で作った単語、或いは日本語ではあまり使わない名詞を示す。例えば、「幸福」における「男の病」、「疲れ病」、「腐れ病」と「夾竹桃の家の女」に現れている中国語から借用した「銀竹」などの単語である。最後は字面の他に別の意味を含めている言葉を表す傍点である。この場合、傍点は強調、アイロニー、呼応、逆説、暗示など、様々な機能を持っている。例えば、「鶏」の中の、作品の前半に現れている、小さな模型を指す「小もの」に対し、その後の文章に提起されている「大もの」は地位の高い人を指している。その時の傍点は、「小もの」と「大もの」の意味に対し、読者の注意を喚起する他に、前後呼応の機能も働いていると考えられる。また、「ナポレオン」の最後に、「一年に三四回しか見られない大きな船が発つのだから」、島の者が殆ど濱辺へ見送りに来たという描写がある。実は作品の冒頭で既に明示したように、その船は単なる南方離島通りの小汽船であり、決して大きな船とは言えない。この傍点によって、「大と小」という南方離島の居民と内地人の〈私〉との観念の差異を明確に提示しており、未開の南方離島と文明の内地という両極的な生活環境をも暗示しているのである。このように、作中の傍点をよく玩味すると、文章の深層に潜んでいる中島の意図が明らかになるのである。次に、「マリヤン」における第三類の傍点を取り上げ、傍点の意味分析を通し、中島なりのマリヤン像を解明する。

(二)〈私〉の目に映るマリヤン像

中島敦がパラオに所在する南洋庁に赴任したのは昭和十六年のことである。南洋群島は第一次大戦が始まってから日本に占領され、更に戦後日本に委任統治された。昭和十六年の当時、既に多くの日本人移民がおり、鉱石採掘や海運やホテル経営、農漁業など、多くの事業が展開された。換言すれば、当時のパラオはもはや完全に未開の熱帯島ではなかった。その背景に基づいて書いた「マリヤン」という作品において、〈私〉の目に入った半開化された南洋は「温帯の価値観」と「熱帯の価値観」が混乱している所である。そして、南洋という所に現れている価値観混乱の現状と同じく、〈私〉はマリヤンと呼ばれた島民女の身にも不調和を見た。赤銅色の壮健な体に「眞白な洋裝にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にした」マリヤンの姿が〈私〉に与えたイメージは「短い袖からは鬼をもひしぎさうな赤銅色の太い腕が逞しく出てをり、圓柱の如き脚の下で、靴の細く高い踵が折れさうに見え」、可笑しい光景である。マリヤンの洋服姿に対する評価のみならず、〈私〉が

「天井に吊るされた棚には椰子バスケットが澤山竝び、室内に張られた紐には簡單着の類が亂雜に掛けられ、竹の床の下に雞共の鳴聲が聞える」ような、マリヤンの原始的な南洋風の家で、『ロティの結婚』や『英詩選釈』など西洋文明を代表する本を見た時も、「何だかへんな氣がした」と表明した。このように、マリヤンに対する描写を通してみると、〈私〉の眼差しから見たマリヤン像は、文明と未開の間に挟まれた南洋における矛盾・不調和の溢れている人物像であることが窺える。

一方、当時のパラオでは、皇民化教育の下に島民の子供たちは公学校と呼ばれる学校に通っていたが、差別教育のせいで中等教育を受けることができなかった。[7]そのような教育的背景の下、マリヤンは島民のエリートとして描かれている。母系制のパラオでは、実母がコロールの第一長老家出身のため、マリヤンはコロール島第一の名家に属するのである。しかも、パラオでは相当に名の聞えたインテリ混血児の養父の下で、マリヤンは英語ができただけではなく、内地の女学校に二三年も通ったようである。〈私〉の叙述によって分かるように、当時、教育がまだ普及していなかったコロール島では、厨川白村の『英詩選釈』やピエール・ロティの『ロティの結婚』など、多様な書物や雑誌を読んでいるマリヤンは、島民の間のインテリだと言っても過言ではない。

初めてH氏の家でマリヤンが英語ができるのを知った時、〈私〉は驚いた。そして、英語ができるのみならず、内地の女学校にも通っていたというH氏の褒め言葉に対し、マリヤンは「一寸てれたやうに厚い脣を綻ばせたが、別にH氏の言葉を打消しもしない」。ここで、中島が故意に「てれた」の所に傍点を付けていることに注目したい。社会心理学の分析によると、「照れる」という言葉は、「良くも悪くも、本来の自己像とは少し違った印象が他者に示された状況」で生じる「テレの感覚」を示す用語である。[8]その心理学的な分析に従えば、マリヤンの「照れた」ような表情は、本来の自己像と少し違った印象をH氏に示され、そしてH氏に褒められたこと、つまりH氏の過称によって現れた反応である。しかし、その後の「H氏の言葉を打消しもしない」という行動を対照すると、照れた表情をしていたマリヤンは、H氏の自分に対する讃美が過称ではなく、多少とも事実の陳述だとも思っていたと考えられる。

また、マリヤンの友達は、どうも日本人ばかりのようである。しかも、何時も内地人の商人の細君連の縁臺などに割込んで話しているマリヤンは、大抵の場合、「其の雜談の牛耳を執つてゐるらしい」のである。〈私〉の叙述を通し、マリヤンは、自分の身に付けた教養と能力に対し、相当な自信を持っていることが窺えるのである。

しかし、このようなマリヤンは、「自分のカナカ的な容貌を多少恥づかしいと考へてゐるやうである」。そして、ある日、〈私〉は窓から「色の褪せた、野良仕事用のアツパツパに、島民竝の跣足」という格好で、他の島民女と一緒に勤労奉仕しているマリヤンの姿を見た。〈私〉を認めると、マリヤンは「ニツと笑つたが、別に話しにも來ない。てれ隠しの様にわざと大きな掛聲を『ヨイシヨ』と掛けて、大籠を頭上に載せ、その儘さよならも

言はずに向ふへ行つて了つた」。

内地人のような能力を持っているにもかかわらず、マリヤンは自分のカナカ人種の血統を恥ずかしく感じていた。マリヤンの心理が反映しているのは、島民女の普段の仕事姿を見られた時、照れて〈私〉に挨拶もせずに行ってしまったことである。ここで中島が再び「てれ隠し」、「さよなら」を傍点で強調していることに注目したい。

前述した「てれる」の心理学的な分析によると、「てれ隠し」というのは、他者にとってなじみのない自己像を露呈したため、自分の恥ずかしさ・気まずさなどをごまかし隠そうとする態度・動作である。〈私〉の視座から見た島民女の姿はマリヤンの本来のままの姿であるが、「カナカ人種の血統」を認めたくないマリヤンにとって、島民女の姿は「他者にとってなじみのない自己像」である。それ故、「他者にとってなじみのない自己像」がばれたと思っていたマリヤンは、「照れ隠し」の行動をしたのである。

一方、わざと大きな掛け声を出したマリヤンは、〈私〉に何も言わずに行ってしまった。東京の女学校に二三年間通っており、何時も内地人の商人の細君と堂々と日本語で雑談しているマリヤンは、自分の島民女らしい姿を見られた時、普段誇りを持っている自分の日本語が使えなくなったのである。それ故、「さよなら」という簡単な日本語すら使わずという意味で、中島は意図的に「さよなら」に傍点を付けたのであろう。

〈私〉の叙述を通し、マリヤンは自分も内地人のような優れた能力を持っていると思っている一方、やはり自分の島民血統に劣等感を感じており、内地人との間に越えられない壁で隔てられているという実感を持っている。このように、〈私〉の視座を通し、マリヤンに対する感覚を描写するのみならず、傍点の裏側の意味とマリヤンの行為を相互に対照することにより、マリヤンの心理をも巧妙に探っている。

（三）『ロティの結婚』と『ノア・ノア』

「マリヤン」において、中島は全篇〈私〉の眼差しを通しマリヤンを描写している。その中で、マリヤンが「語られる者」から「語る者」に転じて自分の意見を述べる所は３箇所しかない。まずは『ロティの結婚』に対する不満の意を洩らした言葉であり、次はマリヤンが自分の結婚対象について聞かれた時の返事である。最後は〈私〉がH氏と一時内地へ出掛けることを伝えた時の、マリヤンの反応である。以上の３箇所の話は、一見関連性を持たないものである。しかし、作品中におけるマリヤンの話をよく考えれば、無関係に見える三つの話は実に強く繋がっている。その関連性を分析すると、中島のマリヤン像がより一層興味深く読めると考えられる。

「マリヤン」の最後、〈私〉が内地へ一時出掛けることをマリヤンに告げる場面では、中島の描写手法によってマリヤン像の事実性が崩れており、中島なりのマリヤン像が浮び出している。

此の春、偶然にもH氏と私とが揃つて一時内地へ出掛けることになつた時、マリヤンは雞をつぶして最後のパラオ料理の御馳走をして呉れた。

正月以來絶えて口にしなかつた肉の味に舌鼓を打ちながら、H氏と私とが「いづれ又秋頃迄には歸つて來るよ」（本當に、二人ともその豫定だつたのだ）と言ふと、マリヤンが笑ひながら言ふのである。

「をぢさんはそりや半分以上島民なんだから、又戻つて來るでせうけれど、トンちやん（困つたことに彼女は私のことを斯う呼ぶのだ。H氏の呼び方を眞似たのである。初めは少し腹を立てたが、しまひには閉口して苦笑する外は無かつた）はねえ。」

「あてにならないといふのかい？」と言へば、「内地の人といくら友達になつても、一ぺん内地へ歸つたら二度と戻つて來た人は無いんだものねえ」と珍しくしみべと言つた。

ここで興味深いのは、中島が「一時」に傍点を付けていることである。実際には、昭和十七年の春の時点で、中島は既に島の暮らしと南洋庁の仕事への我慢が限界に達し、内地に戻る意向を強く表しているのである。村山吉廣の研究によると、「（昭和十六年）十二月に入ると三十一日付で敦は役所に『心臓性喘息ノタメ劇務ニ堪ヘズ』という理由で内地勤務の希望を提出した。年が明けて三月十七日、敦は出張名目で帰国した。もう二度と南洋へ戻る気はなかった」[9]のである。また、中島が南洋で知り合った親友の土方久功は、その出張の前、二人とも既に役所を辞めて内地に帰ろうと決めたと述べている。[10] それ故、作品中の「一時」に内地へ出掛けるというのは明らかに事実と相違していることが分かり、逆説的な意味として、中島は故意に「一時」に傍点を付けたと考えられる。

それでは、何故〈私〉は内地へ出掛けるのを「一時」的なことだと強調し、マリヤンに必ず南洋に戻ることを再三にわたり保証したのか。恐らくそれは中島が自分なりのマリヤン像を作るためのトリックであり、上記の引用のようなマリヤンとの会話も中島の作り話だと考えられる。

ゴーガンの『ノア・ノア』は中島と土方久功の愛読書である。[11] その中に、ゴーガンが旅に出るため、旅の支度をしているシーンがある。そのゴーガンの姿を見た友人のアナニー夫婦とゴーガンとの会話は、次のように描写されている。

「あなた方ヨーロッパ人は」とアナニーの細君はつけ加えた。「いつでも、ずっとここに暮らしているのだと約束はする。だのに、皆があなた方を愛するようになると、きまったように、ここからいってしまう！　あなたは、はっきりまた帰ってくるとはおっしゃるけれど、もうきっと永遠に帰って来ないのだ」

「そんなにいうんだったら、僕は誓ってもいい、僕の計画では、しばらくの間旅行をして来るだけなんだから。しばらくしたら、しばらくしたらね、またきっと逢えるよ」（私は虚言をつこうとは思わなかった）[12]

「マリヤン」と『ノア・ノア』を対照すると、ヨーロッパ人であるゴーガンと島民女であるアナニーの細君との対話はまさに〈私〉とマリヤンとの対話である。その筋を導入するために、中島は意図的に「一時内地へ出掛ける」という情景を作ったと推測できよう。そして、この筋の導入に従い、ヨーロッパ人（ゴーガン）＝〈私〉、島民女（アナニーの細君）＝マリヤンという図式が成立している。

『ノア・ノア』はゴーガンの旅行記であり、十九世紀末のタヒチを記録している。タヒチの原始的な風景や「野蛮人」の生活ぶりなどを記していると同時に、ゴーガンと島民妻のテフラとの恋物語も描かれている。ロティがララフを捨ててフランスへ帰ったように、『ノア・ノア』の中では、ゴーガンはテフラを残してフランスへ帰った。マリヤンは1870年代のタヒチを描いている『ロティの結婚』に対して、「昔の、それもポリネシアのことだから」と不満の意を洩らしながら、「まさか、こんなことは無いでせう」と全面的に否定していた。しかし、「一時内地へ出掛ける」ことについての会話を導入することによって、マリヤンの立場を微妙に動揺させるのである。そのような『ロティの結婚』に不満を持っていたマリヤンが、『ノア・ノア』の中に現われている一人の島民女と同じ考え方を持っており、同じ口ぶりで話したのは、極めて皮肉な表現である。一生懸命に英語・日本語を勉強し、島民女のイメージから離れようとしているマリヤンは、自分の言動によって、再び自分を島民女の地位に引き戻す。こうして、心の中に矛盾・葛藤が生じているマリヤン像が読者の前に現われる。中島は意図的に傍点を使い、更に巧妙にマリヤンの少ない言葉を利用し、自分なりのマリヤン像を明確に表現している。

（四）『ロティの結婚』とマリヤンの結婚

『ロティの結婚』という本は「マリヤン」で重要な役割を占めている。前述のような『ノア・ノア』との対照として提起された以外、その後のマリヤンの結婚の話にも深い関連を持っている。「マリヤン」における『ロティの結婚』に関しては、次のような描写がある。

> 其の「ロティの結婚」に就いては、マリヤンは不滿の意を洩らしてゐた。現實の南洋は決してこんなものではないといふ不滿である。「昔の、それもポリネシヤのことだから、よく分らないけれども、それでも、まさか、こんなことは無いでせう」といふ。

マリヤンの言葉を詳しく分析しても、実はマリヤンが『ロティの結婚』を否定する理由ははっきりしていないことが分かる。昔の、しかも遠いところの物語のため、自分はよく分からないと言ったにもかかわらず、依然として「現實の南洋は決してこんなものではない」と批判している。マリヤンの発言は客観的な理由によるものではなく、単に感情的なものだと考えられる。しかも『ロティの結婚』に対し、どのような部分に反発していたの

かも明確に表明しておらず、「こんなもの」「こんなこと」でごまかしていた。マリヤンが本当に『ロティの結婚』に不満の意を表したのか、それとも、その発言は中島が自分なりのマリヤン像を作るために置いた布石なのか、ここでもう一度考えなければならない。

『ロティの結婚』は十九世紀末フランス海軍少尉候補生ロティとタヒチの女ララフの恋物語である。物語はロティが帰国することによって、捨てられたララフがその後絶望で亡くなったという結末のため、ロマンチシズム小説と言われている一方、多くの場合は「植民地的セックス利用小説」[13]と評価されている。マリヤンは作品中において、南洋の母系社会の下で、自分で嫉妬男の夫を二度も追い出した人物として描かれている。そのようなマリヤンが『ロティの結婚』に不満なのは、決して小説に溢れていたロマンチックな雰囲気のためではなく、ロティに捨てられて絶望で亡くなったララフの悲惨な結末のためであろう。そして、マリヤンの『ロティの結婚』に対する否定と不満とその後のマリヤンの結婚の話を対照すると、興味深い関連性が見られる。

大晦日の夜、〈私〉とH氏とマリヤンは南洋神社に初詣へ行こうと思い、途中で休憩した。その時の状況は、次のように描写されている。

> 去年の大晦日の晩、それは白々とした良い月夜だつたが、私達は――H氏と私とマリヤンとは、涼しい夜風に肌をさらしながら街を歩いた。夜半迄さうして時を過ごし、十二時になると同時に南洋神社に初詣でをしようといふのである。私達はコロール波止場の方へ歩いて行つた。波止場の先にプールが出來てゐるのだが、其のプールの縁に我々は腰を下した。
>
> （中略）
>
> 何のきつかけからだつたか、突然、H氏がマリヤンに言つた。
>
> 「マリヤン！　マリヤン！（氏がいやに大きな聲を出したのは、家を出る時一寸引掛けて來た合成酒のせゐに違ひない）マリヤンが今度お婿さんを貰ふんだつたら、内地の人でなきや駄目だなあ。え？　マリヤン！」
>
> 「フン」と厚い脣の端を一寸ゆがめたきり、マリヤンは返辭をしないで、プールの面を眺めてゐた。月は丁度中天に近く、從つて海は退潮なので、海と通じてゐる此のプールは殆ど底の石が現れさうな程水がなくなつてゐる。暫くして、私が先刻のH氏の話のつづきを忘れて了つた頃、マリヤンが口を切つた。
>
> 「でもねえ、内地の男の人はねえ、やつぱりねえ。」
>
> なんだ。此奴、やつぱり先刻からずつと、自分の將來の再婚のことを考へてゐたのかと急に私は可笑しくなつて、大きな聲で笑ひ出した。さうして、尚も笑ひながら「やつぱり内地の男は、どうなんだい？　え？」と聞いた。笑はれたのに腹を立てたのか、マリヤンは外つぽを向いて、何も返辭をしなかつた。

ここで、中島が「きつかけ」の所に傍点を付けていることにも注目したい。十二月三十一日の日記では、「夜土方氏方に到[る]り、阿刀田氏高松氏等と飲み喰ひ語る。十一時、外に出で一同マリヤを誘出し、月明に乗じコロール波止場に散歩す、プール際にて少憩。歸途初詣の人に會ふこと多し、疲れて歸る、」と記している。両方を対照してみると、明らかに作品に描かれている大晦日の夜の状況は現実と違っている。中島はここで「選択する眼」を使い、故意に「阿刀田氏高松氏等」同行していた友達を省略し、マリヤンが大勢の人の前では口にしにくい結婚のことを容易に言えるような環境を作った。そして、何かの「きつかけ」で、H氏はマリヤンの結婚の話題を出した。しかし、中島の描写手法を考えると、実は、このマリヤンの結婚についての会話は、酔っぱらったH氏の何かの「きつかけ」によって不意に提起されたものではない。中島は自分なりのマリヤン像を組み立てるために、意図的に「きつかけ」を作り、マリヤンの結婚の話を導入したと考えられる。それ故、彼は敢えて「きつかけ」に傍点を付けているのである。

最後に、内地人と結婚する意向への問いに対し、マリヤンは、「でもねえ、内地の男の人はねえ、やつぱりねえ。」とはっきり返答していない。しかも、〈私〉の再びの質問に対し、「外つぽを向いて、何も返辭をしなかつた」。このマリヤンの回答について、ロバート・ティアニーは「決して肯定的ではない。つまりマリヤンは『島民妻』になるつもりはない」と論じた。[14] しかし、ティアニー氏が論じたように、マリヤンの返事が「決して肯定的ではない」ことは否定できないが、マリヤンの話をよく玩味すると、明らかにマリヤンの躊躇不安の気持ちが読めるのである。「島民妻」になるつもりはないのではなく、「島民妻」は終始捨てられる運命から逃げられないと思っていたため、マリヤンは「島民妻」になる勇気がないのであろう。彼女は『ロティの結婚』に対しては「現實の南洋は決してこんなものではない」と強く主張しながら、現実には内地人との結婚に直面した際に、やはりきっぱりと決断を下すことができなかった。マリヤンの話に潜んでいる矛盾は再びマリヤンの心理的葛藤を現わした。マリヤンのような、如何にも優秀な島民女とは言え、内地人との間に聳えている壁を超える自信はない。どのように努力して内地人のように生きようとしても、やはり内地人になれないのである。マリヤンの回答によって、心理的なディレンマに陥るマリヤン像が一層確実に作り出されたのである。

三、相対化された南洋と日本――〈マリヤン〉と〈私〉の図式

前述のように、中島は意図的にマリヤンに自分の意見を述べさせる場面を作り出した。しかし、マリヤンの発言を詳しく考察すると、彼女は殆ど曖昧な言い方をし、しかも説明不足のような回答をしている。中村和恵が評したように、読者にとって、確かにマリヤンの答えは足りないような気がする。[15] しかし、中島の創作意図を考えれば、そのような曖昧な回答でなければ、心の中に複雑な葛藤が付き纏わっているマリヤン像が表現できない

のである。表面的には、中島は南洋における一人の島民女を描写していたが、実際には、中島の描写手法によって、作品におけるマリヤンは中島なりのマリヤン像としてしか捉えられない。中島による傍点の意味を考察すると、マリヤンの言葉は明らかに中島なりのマリヤン像を作るために故意に導入されたものだと分かる。それ故、マリヤンが曖昧な言い方で回答する原因は、作者としての中島が故意に曖昧模糊とした回答によって自分なりのマリヤン像を造形したからである。更に、そのようなマリヤン像を意図的に作り出そうとした中島自身の心境を反映しているとも言える。

『ロティの結婚』におけるロティが人種差別の観念によって、ラフフとの間には「深い深い淵が、永遠に開かぬ恐ろしい柵が横たはつてゐた」[16]と思ったように、「マリヤン」における〈私〉も、終始内地人の眼差しでマリヤンを見遣っている。「南洋で一寸顔立が整つてゐると思はれるのは大抵どちらかの血が混つてゐるものだ」という説明を前提として、〈私〉は「純然たるミクロネシヤ・カナカの典型的な」マリヤンの顔が「大變立派だ」と思ったが、「人種としての制限は仕方が無いが、其の制限の中で考へれば、實にのびへと屈託の無い豐かな顔だと思ふ」と付加して説明し、人種差別の観念を強く露呈した。優美な衣装を着て舞踏会に参加するタヒチの女は、ロティの視座では「生魚や人肉を嗜食する首をそなへる女――英國人の令嬢について教育を受け、スペイン女のやうに踊る」[17]奇怪な娘としか見えない。それと同様に、〈私〉の目を通し、マリヤンの盛装姿は可笑しい以外何も考えられない。一生懸命内地人、即ち文明人になろうとしたマリヤンに対し、〈私〉はやはりロティと同じ眼差しで冷淡に見ていたのである。

一方、このような〈私〉に相対するのはマリヤンである。彼女は必死に島民女のイメージから抜け出そうとし、内地人に殆ど負けない能力を見せる。『ロティの結婚』を強がって批判したが、やはり平然と内地人と結婚する勇気と決心はない。どのように努力しても、他者の鏡に自分を映す時、マリヤンは依然として未開人というイメージから抜けられないという恐怖を感じているのである。

エンディミヨン・ウィルキンソンは近代西洋人と日本人との相互認識について、次のように述べた。「近代日本の形成期に、日本人は、恐怖と尊敬の入りまじった目でヨーロッパ人を見た。（中略）それに比べると、ヨーロッパ人は、日本人に対して終始冷淡だった。ときに蔑み、ときには恐れもしたが、あまり畏敬の念は抱かなかった。」[18]文明に憧れており、懸命に内地人になろうとしながら、内地人になれない恐怖心を抱いているマリヤン。努力して文明化しようとしたマリヤンを島民女としてしか認めない〈私〉。マリヤンと〈私〉の人物像によって、「マリヤン」の中における〈私〉対マリヤンの相対関係は、当時の西洋人対日本人の相対関係をも反映していると思われる。

日本は明治維新以来、「文明開化」というスローガンを掲げ、積極的に欧米列強に西洋文明を学んだ。当時、福沢諭吉は「文明開化」の概念を相対化し、世界の文明を「野蛮」「半開」「文明」という三段階に分け、日本が「半開」の国に属すると指摘した。「半開」

の国から「文明」国に進化するために、彼は更に「脱亜論」を提出し、西洋文明を唯一の指標として目指していた。そして、「半開」の国から脱出し、欧米列強と肩が並べられる文明先進国になる証明として、日本は外へ拡張し、戦争を起こした。[19] 西洋文明を無分別に吸収していた、所謂「自己植民地化」から、海外へ進出し、国力を強くアピールした帝国日本に変身するまで、自己と他者との相対化する過程の中に、日本知識層の間では相当な矛盾や揺らぎが発生したのである。

中島敦は「自我」について、一生をかけて問いを続けていた作家である。〈南洋行〉前後の作品を比較してみると、その問いに対する表現の方法が明らかに異なったとは言え、この問いたがる特質は中島が〈南洋行〉を経験した以降も変わらなかった。太平洋戦争が勃発する寸前は、日本が一気に「半開」から「文明」の強国になれるか否かについて、期待・不安・恐怖・矛盾の雰囲気が溢れている時期である。パラオで半開化の南洋と半開化の島民を自分の目で見て、知識人としての中島は複雑な気持ちを持っていたに違いない。熱帯的な価値観と温帯的な価値観が混乱している南洋に生きるマリヤンと同じく、中島は西洋的な価値観と日本的な価値観が混乱している時代に生きている。当時「半開」の南洋で懸命に内地化（文明化）を追求していたマリヤン像も、当時「半開」の日本で西洋文明を追いかけていた知識人像と一致していると言える。

「マリヤン」では、中島は意図的に「島民」と「内地人」、「自己」と「他者」の間に揺らいでいる矛盾したマリヤン像を作った。物語の筋は表面的には西洋人＝内地人＝〈私〉（中島）、島民女＝マリヤンという図式で進行しているが、裏側には内地人の〈私〉＝西洋人、マリヤン＝日本人の中島という図式が構成されている。中島は当時の日本人知識層をマリヤンに化した。マリヤンの身に見えた複雑な葛藤は当時の知識人である中島自身の矛盾とも考えられる。

文明と未開との間にうろついている中島の矛盾した心境は、同じく「環礁」の「真昼」という作品の中にも、〈私〉の自省の言葉によって現れている。更に、マリヤンのような、異なっている価値観の間に彷徨している人物像は、その後の作品「弟子」と「李陵」でも見られる。「弟子」における子路は、師である孔子の教えによって、「蓬頭突鬢・垂冠・短後の衣」という姿の遊侠の徒から、「後世の所謂『萬鍾我に於て何をか加へん』の気骨も、炯々たる其の眼光も、痩浪人の徒らなる誇負から離れて、既に堂々たる一家の風格を備へて来た」人間に変わった。しかし、子路には、「教を受けること四十年に近くして、尚、此の溝（筆者注――「明哲保身」「形と実行」等に対する孔子の考え方）はどうしようもないのである」。聖人である孔子を「文明」の代表と捉えれば、まだ未熟者である子路は「半開」の人間としか認められない。中島が描いた子路は努力して孔子のような人間になろうとしても、終始孔子との間に越えられない溝が存在している。教化されている（文明化を追求している）過程において、子路にもマリヤンと同様に、矛盾した心理が生じたのである。

更に、「李陵」における李陵は、漢（文明）と匈奴（未開）との間で絶えず揺らぐ人物として描かれている。最後で、李陵は漢の大赦令によって漢へ帰ろうとすれば帰られるし、また胡地に残ったとしても単于に厚遇されると描写されている。しかし、双方から受け入れられるように描かれた李陵は、死ぬまで迷う気持ちを抱いていたため、漢にも匈奴にも属していないと言える。漢の文明世界から匈奴の未開世界に入った李陵は、マリヤンと正反対の立場に立っていた。しかし、漢にも匈奴にも帰属していない李陵と同じく、マリヤンは内地人に成れず、且つ純粋な島民にも戻れない人間である。李陵の漢という文明社会に対する反省及び未開の匈奴社会に対する再認識は、懸命に文明化を追求していた当時の日本の、一人の知識人としての中島が出した自省の声とも言えよう。

四、好意的な〈私〉と代弁者としてのマリヤン

前述のように、〈私〉はロティと同じような文明人の眼差しでマリヤンを観察していた。しかし、興味深いのは、同じく「文明対未開」の眼差しで島民女を見ていたものの、ロティに比べ、作中の島民女のマリヤンに対して、中島はより好意的である。ロティは小説における島民たちをすべて「野蛮人」として一般視している。それに対し、中島による〈私〉は、内地人の角度から「文明対未開」という相対化した眼差しでマリヤンを見ているにも拘らず、マリヤンと他の島民との差異にも注目している。他の島民のレベルと違い、マリヤンはより多くの教育を受けたインテリである。「恐らく、マリヤンは、内地人をも含めてコロール第一の読書家かも知れない」という描写のように、他の島民より、内地人よりも優れたマリヤンの教養を強調している。それは、自分をマリヤンに投影したために無意識的に現れた好意だと考えられる。

一方、作中のマリヤンは『ロティの結婚』に不満を洩らしている。前節で分析したように、『ロティの結婚』に対する反発は、中島が自分なりのマリヤン像を作るために故意に導入した仕組みである。しかし、「こんなもの」「そんなこと」のような曖昧な言い方だけでその小説を批判したマリヤンの話は、やはり何か不十分な感じがする。確実な理由を言わないことで、マリヤンの発言は主観的、しかも感情的なものだと読者に読み取らせている。

中島の蔵書目録には、ロティの『お菊さん』（野上豊一郎訳、昭和15年）が残っている。『ロティの結婚』と同じく、『お菊さん』もフランス人の一時滞在者であるロティが当地の島民女とかりそめの結婚をして別れるという内容の小説である。ロティからすると、当時の日本もタヒチも半植民地化され、未開の場所でしかなかったのである。それ故、中村和恵は、『ロティの結婚』がまさに『お菊さん』のタヒチ版であると評した。[20]

『お菊さん』は、『ロティの結婚』と同様に、当時フランスではベストセラーになった。しかし、日本では日本文化と日本人に対する蔑視と捉えられ、「日本人にとっては必ずしもこころよい読後感をもたらすものではない」[21] と評されている。広く西洋文学に通じ、

西洋文明をも懸命に吸収していたとは言え、近代日本の知識人として、中島はやはり『お菊さん』に描かれているロティの日本観に違和感を抱いているのであろう。

「マリヤン」において、南洋島の島民女であるマリヤンは同じく南洋島を背景とした『ロティの結婚』を批判する。しかし、マリヤンの曖昧な発言によって、その不満は感情的なものだと強く感じられる。そして、マリヤン＝日本人の中島という図式の視点によって考えれば、中島の代弁者としてのマリヤンの役割は明らかである。マリヤンの『ロティの結婚』に対する批判は、マリヤンに投影された中島の日本を背景とした『お菊さん』への反発と同質だと考えられる。それ故、マリヤンは、「こんなもの」「そんなこと」のような曖昧な言い方でしか『ロティの結婚』を批判できない。なぜなら、「こんなもの」「そんなこと」という曖昧な言葉には、マリヤンの立場からのロティのタヒチを巡る言説への不満のみならず、中島自身のロティの日本に対する言説への批判ともなりうるからである。マリヤンに投影された中島は、西洋的と日本的な価値観が揺らいでいる時代に、密かにマリヤンの口を通し、西洋に対する反発を表現したのである。

この作品において、マリヤンに関する叙述には、〈私〉のマリヤンに対する好意的な傾向が見られる。一方、『ロティの結婚』への不満に関する曖昧な発言を通し、マリヤンを代弁者とした、中島自身のロティによる日本言説への反発も窺える。このように、「マリヤン」における内地人の〈私〉＝西洋人、マリヤン＝日本人の中島という裏側の図式がより一層明らかになるのである。

五、結び

以上、本稿では、「マリヤン」における中島の描写手法を分析し、主人公のマリヤン像を創作する中島の意図から、作中人物の図式構造を新たに検討した。中島は〈私〉からの視点とマリヤン自身の言葉を用い、更に「選択する眼」や「傍点」を使い、自分なりのマリヤン像を作り出した。そのように作られた中島なりのマリヤン像は、懸命に内地人になろうとしても、終始内地人との間に隔たっている壁を越えられない恐怖を持ち、心に複雑な葛藤を持っている人物である。そして、当時の南洋対日本と日本対西洋との相対的関係を考えれば、このような矛盾したマリヤン像は、正しく当時西洋化を目指し、文明開化を追求していた日本の知識層を反映している。

このように、「マリヤン」という作品は新しい視点によって解読できるのである。中島は表面的には熱帯的な価値観と温帯的な価値観の中に迷っているマリヤンのことを描写していたが、実際には、当時の知識人である中島自身が西洋的な価値観と日本的な価値観との間で揺らぐ心理をも密かに暗示していた。「マリヤン」という作品の筋は表面的には西洋人＝内地人＝〈私〉(中島)、島民女＝マリヤンという図式で進行しているが、裏側には内地人の〈私〉＝西洋人、マリヤン＝日本人の中島という図式で構成されているのである。

中島は自分を南洋の島民に投影していた。西洋文明を追いかける時代の潮流の中で、中島は意図的に作ったマリヤン像を通し、近代日本知識人である自分の、複雑で、且つ矛盾した気持ちを表したのである。

※文中における中島の作品に関する引用及び傍点の使用は、全て『中島敦全集』第一巻（筑摩書房、昭和51年）によった。

注

1　山下真史「中島敦『環礁』の方法」、『国文学解釈と鑑賞』59⑷、至文堂、1994年。

2　須藤直人「太平洋の異人種間恋愛譚―植民地ロマンスとその「書き換え」―」、『比較文学研究』88号、東大比較文学会、2006年。

3　ロバート・ティアニー「南洋を「西洋眼鏡」で見る　中島敦の「マリヤン」をめぐって」、筑波大学文化批評研究会編集『〈翻訳〉の圏域―文化・植民地・アイデンティティ』、株式会社イセブ、2004年。

4　濱川勝彦「『南島譚』の世界」、『中島敦の作品研究』、明治書院、1981年、p.207。

5　昭和十六年十二月二十一日の日記において、「今日の料理はマリヤの馳走なり。」と記されている。また、十二月三十一日の日記にも、「十一時、外に出で一同マリヤを誘出し、月明に乗じコロール波止場に散歩す、プール際にて少憩。歸途初詣の人に会ふこと多し、疲れて歸る。」という叙述が残されている。『中島敦全集』第三巻、筑摩書房、1976年、p.537・539。

6　上前淳一郎「三十年目の南洋群島」、『中島敦研究』、筑摩書房、1978年、p.281-289。

7　詳細は南洋群島教育会編『南洋群島教育史』（青史社、1982年）参照。

8　菅原健介『人はなぜ恥ずかしがるのか―羞恥と自己イメージの社会心理学』、サイエンス社、1998年。

9　村山吉廣『評伝・中島敦　家学からの視点』、中央公論新社、2002年、p.127。

10　土方久功は南洋民俗研究家であり、「日本のゴーガン」と呼ばれる美術家でもある。中島敦より十二年も早く、昭和四年にパラオに向かった。中島はパラオで土方と知り合い、二人は直ちに親友になった。「マリヤン」の中におけるH氏は、中島が土方氏をモデルとして描いた人物である。

　土方は「パラオでのトンと私」に、「戦争がはじまってしまって、トンも私も病気がよくならないので、もう二人とも役所をやめて内地に帰ろうと言っていたその帰る前」、中島と本島一周をしたことを記している。（『中島敦研究』、筑摩書房、1989年、p.279。）

11　中島の蔵書目録には、ポール・ゴオガン著、前川堅市訳の『ノア・ノア』（岩波書店、1932年）が残されている。（田鍋幸信「中島敦　蔵書目録」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書梶井基次郎・中島敦』有精堂、1978年、p.279）また、土方久功は大正十五年一月十五日付の日記の中に「ノアノアは古くに読んだ。地震で焼いてから再び新らしいのを買ったほどノアノアは私に懐かしい。」と記している。ゴーガンの『ノア・ノア』に影響され、土方久功は南洋へ濃厚な憧憬を抱いた

のである。（岡谷公二「土方久功とポール・ゴーギャン」、橋本善八・野田尚稔編『パラオ――二つの人生　鬼才・中島敦と日本のゴーギャン・土方久功』展カタログ、世田谷美術館、2007年、p.23）

12　ポール・ゴーガン著、前川堅市訳『ノア・ノア』岩波書店、1988年、p.48。

13　エンディミヨン・ウィルキンソン著、徳岡孝夫訳『誤解―ヨーロッパVS.日本』、中央公論社、昭和1980年、p.73。

14　同注３。

15　中村和恵「コメント」『言語文化研究』第十四巻第一号、2002年。

16　ピエール・ロティ著、津田穣訳『ロティの結婚』、岩波書店、1939年、p.161。

17　同注16前掲書、p.149。

18　同注13前掲書、p.31。

19　小森陽一『ポストコロニアル』、岩波書店、2006年。

20　同注15。

21　落合孝幸『ピエール・ロティ―人と作品』駿河台出版社、1992年、p.2。

― こう・しつくん、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学 ―